

支え合いは国籍を越えて

日本に来たきつかけ

日本に来る前は、ブラジルのサンパウロ州で妻とカフェを経営していましたが、店があった場所は治安が悪く、危険を感じることもありまし。そこで将来を見据えて来日することを決意しました。1997年に単身で来日し、住む家や仕事などが安定してから、妻と子ども二人を呼び寄せました。

子どもはグローバルな人材に

来日当時、子どもは9歳と7歳。現在とは違い、当時は小学校に母語支援員はいなかったため、二者懇談等で先生と話すときは本当に困

りました。毎日学校に通っている子どもたちはすぐに日本語を覚えてきました。一方で妻は日本語がわからず、でも子どもたちの一日の様子などはきちんと知っておきたかったので、家の中ではポルトガル語、家の外は何語でもOKという家族のルールを作りました。これにより、ポルトガル語を忘れかけていた子どもたちも、日本語とポルトガル語を使いこなすバイリンガルになりました。来日後に家庭のルールを決めたことで、母語や母国文化も継承することができたと思います。

支えたい気持ちに国籍は関係ない

日本に来てからたくさんの試練がありました。そのつらい経験のおかげで周りの人の気持ちがわかるようになりまし。慣れない国で生活を築くことがいかに大変なことかが分かるから、同じように困っている人を助けたいと思います。それはブラジル人に対してだけでなく、日本人が困っている場合も同じ。これからも、日本語とポルトガル語が話せるという強みを活かして、国籍や言葉に関係なく困っている人を支援できればと思っています。



丸山 イサオさん
製造業

みんな笑顔になってほしい

日本に来たきつかけ

1993年、ブラジルでの生活が厳しくて、姉とともに来日しました。3年間は日本で働く予定でしたが、長女の出産を機に一時帰国。ブラジルで出産し、娘を家族に預けて再来日しましたが、後に娘を呼び寄せました。

最後まであきらめない

日本で生活する上で、経済的に安定したいと思い、ハローワークが主催する職業訓練を受講。ヘルパー2級取得に挑戦しました。当時、日常的な日本語であれば、読み書きもできましたが、介護に関する日本語は専門用語が多く、教

支えることで恩返し

介護の仕事を始めた頃は、日誌や記録などを書くことに苦労しましたが、人一倍努力してきました。正社員になった今も支えてくれる同僚の気持ちに応えるために職場で信頼される人材になりたいと頑張っています。また、外国人の私と

支えたい気持ちに国籍は関係ない

の接し方にとまどっていた利用者も、毎日一緒に生活していく中で少しずつ心を開いてくれ、いまでは「ルアナの笑顔を見ていると、私も笑顔になる」と嬉しい言葉をかけてくれるようになりました。これからもたくさん利用者に笑顔になつてもらえるよう、「支える側」として今以上に周囲の人々の力になりたいと思っています。



我喜屋 ルアナさん
介護職

みんなが住み続けたいまちへ

市では昨年5月に「第2次甲賀市多文化共生推進計画」を策定し、国籍に関わらず人生のどの場面においてもみんなが安心して暮らすことができるような切れ目のない支援を行うことを明記しました。

国籍に関わらずみんなが地域で活躍し、全ての人にとって住み続けたいまち、それが『多文化共生』のめざすところ。市では、計画の基本目標の実現に向け全力で取り組みます。

基本目標

- 1 コミュニケーションの充実
- 2 安心して暮らせるまちづくりの推進
- 3 互いに支えあう多文化共生のまちづくり

3つの壁を知ろう！

日本で暮らす外国人は生活の中で主に次の「3つの壁」があると知られています。

1 言葉の壁

日本語能力が不十分のため、情報が正確に伝わらず誤解が生じたり、コミュニケーションに支障がでることです。学校からの手紙の内容や災害時に発信される情報が分からないなど、日本語の習得が十分でないことで不便を感じたり、ときには命が脅

かされたりする場合もあります。

2 制度の壁

日本の制度を知らなかったり、理解していなかったりなどで、必要なサービスを受けられないことです。丸山さんによると、母国のブラジルには自治会という制度がなく、自治会への加入や地域のルールなどは、日本語が不自由なく使える今でも、理解が難しいそうです。また、ごみの出し方も日本独自の分別ルールがあるなど、戸惑うことは容易に想像できます。

3 こころの壁

国籍や文化などの違いから生まれる誤解や偏見です。「日本語では通じないだろう」「外国語は話せない」と自ら決めていませんか？しかし、実際はある程度日本語が話せる外国人市民の方が多いのです。大切なのは近隣や職場などの身近な人と交流し、違いを理解しようとする歩み寄りの気持ちです。

「違い」を原動力により良い甲賀市へ

多文化共生のまちづくりを実現するためには、行政や一部のボランティアの取り組みだけでは不可能です。みんなが「違い」は甲賀市をより豊かにしてくれる原動力だと認識し、身近な交流を通して「違い」を楽しむ気持ちをもつことが、誰もが住み続けたいまちにつながっていくのではないのでしょうか。